

令和3年7月14日

千葉県農林総合研究センター長

I 向こう1か月間の予報

発生量及び発生時期は平年との比較で表す。予想発生量は「多」「やや多」「並」「やや少」「少」で表している。また、予報の根拠の(+)は多発要因、(-)は少発要因であることを示す。並〔発生なし〕は平年並で、今年発生がないことを示す。

なお、「並」とは平年値を中心にして40%の度数に入る幅、「やや多」「やや少」は「並」の外側20%の度数に入る幅、「多」「少」は上記3者の外側10%の度数に入る幅である。

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
イ ネ	いもち病 (穂いもち)	多	7月上旬発生量 いもち：多(+) 気象予報：気温並 降水量並 日照時間並	<ul style="list-style-type: none"> 葉いもちの発生しているほ場では、穂ばらみ期に治療効果のある薬剤で防除する。さらに多発する場合は穂揃期にも薬剤防除する。 <u>P5「これから注意を要する病害虫」を参照する。</u>
	紋枯病	並	7月上旬発生量 ：並〔発生なし〕 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> 穂ばらみ期に発病株率15%以上の場合、薬剤防除する。 <u>令和2年度病害虫発生予報第3号P4「これから注意を要する病害虫」を参照する。</u>
	ごま葉枯病	やや多	7月上旬発生量：やや多(+) 気象予報：気温並	<ul style="list-style-type: none"> 発生が多い場合は薬剤防除する。
	斑点米カメムシ類	大型のカメムシ類	多	7月上旬本田発生量： 多(+) 7月上旬雑草地発生量： やや少(-) 気象予報：降水量並
カスミカメムシ類 (アカヒゲホソミドリカスミカメとアカスジカスミカメ)		やや多	7月上旬本田発生量： やや多(+) 7月上旬雑草地発生量：並 気象予報：降水量並	

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
イネ	イネクロカメムシ	少	7月上旬発生量：少（－） 6月予察灯誘殺数：並 気象予報：降水量並	・ 気温の高い日中は株元において薬剤がかかりにくいいため、薬剤防除は朝や夕方に行う。
	セジロウンカ	並	7月上旬発生量：並 6月予察灯誘殺数：並 気象予報：降水量並	・ 7月中旬頃に株当たり10頭以上寄生していた場合には薬剤防除する。
	ヒメトビウンカ	やや多	7月上旬発生量：やや多（＋） 6月予察灯誘殺数：並 気象予報：降水量並	・ イネ縞葉枯ウイルスを媒介する。 ・ 周辺イネ科植物から6月上中旬頃本田に侵入し、産卵・増殖する。 ・ 幼穂形成期を迎えていない水田でイネ縞葉枯病が多発している場合は、薬剤防除する。
サツマイモ	ナカジロシタバ	並	7月上旬発生量：並 気象予報：気温並 降水量並	・ 早期発見に努め、多発ほ場では薬剤防除する。
	イモキバガ	並	7月上旬発生量：並 気象予報：気温並 降水量並	
ラッカセイ	白絹病	やや多	7月上旬発生量：やや多（＋） 気象予報：気温並 降水量並	・ 病株は周囲の表土と共に除去する。 ・ 収穫前使用日数に注意し、薬剤防除する。
	褐斑病	並	7月上旬発生量：並 気象予報：降水量並	・ 多発ほ場では薬剤防除する。
秋冬ネギ	さび病	多	7月上旬発生量：多（＋） 気象予報：気温並 降水量並	・ 発生初期から薬剤防除する。
	ネギアザミウマ	多	7月上旬発生量：多（＋） 気象予報：気温並 降水量並	・ 高温乾燥期に多発しやすい。 ・ 多発ほ場では、防除効果の持続性が期待できる粒剤の土壌処理と併せて、即効性が期待できる薬剤の茎葉処理などにより、防除する。
	ネギコガ	並	7月上旬発生量：並 [発生なし] 気象予報：気温並 降水量並	・ 高温乾燥期に多発しやすい。 ・ 幼虫は、葉内に侵入して食害するので、初期防除に努める。

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
サトイモ	アブラムシ類	並	7月上旬発生量：並 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> 薬剤防除は、葉裏にも十分かかるようにいねいに行う。
	ハダニ類	並	7月上旬発生量：並 気象予報：気温並 降水量並	
野菜共通	ハスモンヨトウ	並	6月フェロモントラップ誘殺数：並 7月上旬発生量 秋冬ネギ：並〔発生なし〕 サトイモ：やや多（+） 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> 早期発見に努め、卵塊及び集団状態の幼虫を捕殺する。 薬剤防除の場合、幼虫が大きくなると薬効が低下するので、幼虫が分散する前に行う。
	オオタバコガ	やや多	6月フェロモントラップ誘殺数：やや多（+） 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> 幼虫は見つけ次第捕殺する。 施設栽培では、開口部を防虫網で被覆することにより成虫の侵入防止を図る。
ナシ	黒星病	並	6月下旬発生量：発病果率並 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> 被害葉、被害果は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処分する。 気象条件に留意し、適期防除する。
	シンクイムシ類	並	6月下旬発生量：並〔発生なし〕 6月フェロモントラップ誘殺数：やや多（+） 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> 加害が見られる場合は、収穫前使用日数に注意し、薬剤防除する。
	ハマキムシ類	並	6月下旬発生量：並〔発生なし〕 6月フェロモントラップ誘殺数：並 気象予報：気温並 降水量並	
	ハダニ類	やや少	6月下旬発生量：やや少（-） 気象予報：気温並 降水量並	<ul style="list-style-type: none"> 増殖が速いので、発生初期から防除する。 殺ダニ剤に対する抵抗性の発達を助長しないよう、同一系統の剤は年1回の使用とする。

作物名	病害虫名	予想発生量	予報の根拠	防除上の注意事項
温州ミカン	そうか病	多	6月下旬発生量： 果実発病度多（+） 気象予報：気温並 降水量並	・被害葉，被害果は伝染源となるので，ほ場外に持ち出し適切に処分する。
	ミカンハダニ	やや少	6月下旬発生量：やや少（-） 気象予報：気温並 降水量並	・夏期（6～8月）防除の判断は寄生葉率で30%を目安とする。
果樹共通	カメムシ類	やや少	6月フェロモントラップ誘殺数： 少（-） 6月果樹予察灯誘殺数：並 気象予報：気温並	・カメムシ類の発生量は地域差があるため，果樹園への飛来状況は地域や園地により異なる。そのため，園内外をこまめに見回り，発生を認めたら，飛来が多い夕方か活動の鈍い早朝に薬剤防除する。

Ⅱ これから注意を要する病害虫

イネいもち病（葉いもち・穂いもち）

7月上旬の巡回調査では、葉いもち発病株率は16.4%（平年値2.7%）であり、過去11年中1位であった（図1）。また、地域別の葉いもち発病株率は、印旛、香取、海匝、山武、長生及び夷隅地域で平年値を大きく上回っていた（図2）。また、BLASTAMによる、6月10日から7月9日の千葉県内におけるいもち病（葉いもち）感染好適日数は過去11年で2番目に多く、いもち病が発生しやすい気象条件だった。向こう1か月の気象予報は、気温・降水量・日照時間とも平年並で、今後1か月間のイネいもち病の発生量は多と予想されるため、発生がさらに拡大する可能性があるので注意する。

穂いもちは、止葉などの上位葉に発生した葉いもちが伝染源となり、収量・品質への影響が大きくなりやすい。ほ場内をよく見回り、葉いもちの有無を確認するとともに、上位葉に病斑が広がるようなら、航空防除等の共同防除を待たずに個人防除を行うことも必要である。

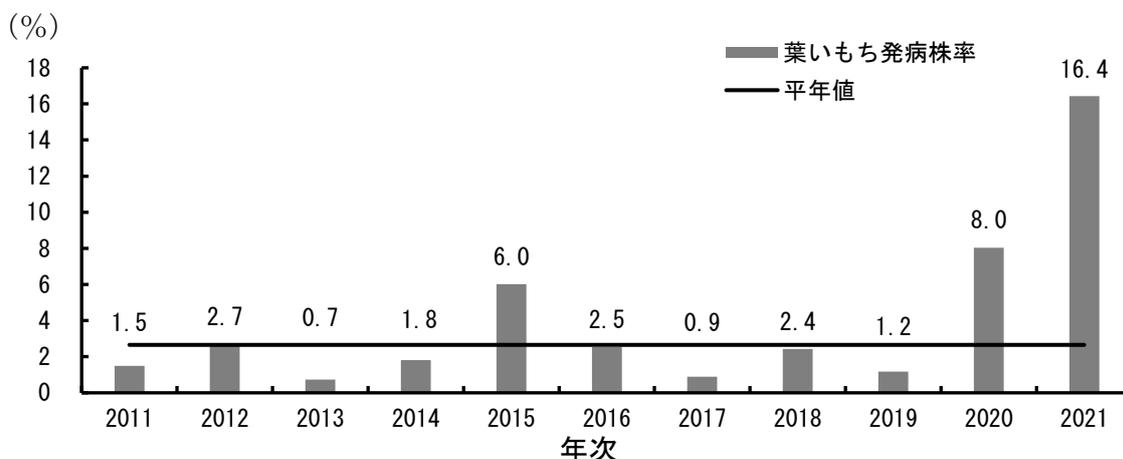


図1 葉いもち発病株率の年次推移（調査基準日7月2日）

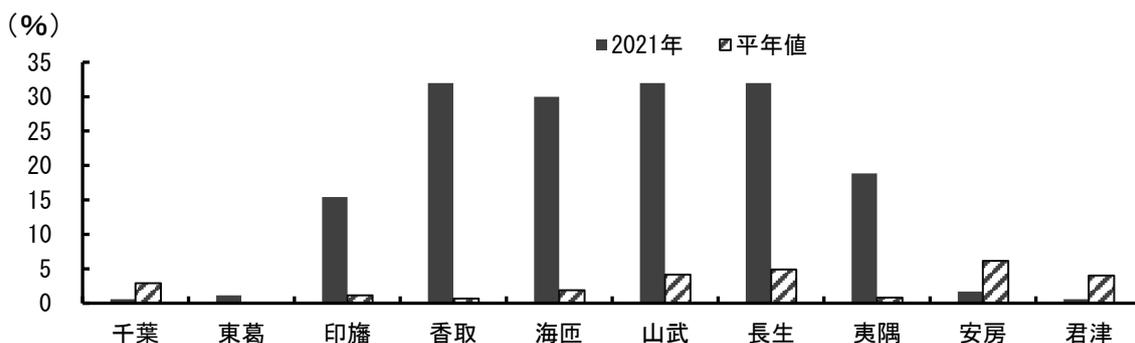


図2 地域別葉いもち発病株率（調査基準日7月2日）

<防除法>

- 窒素肥料の過多、冷水の流入を避ける。
- ほ場においた補植用取り置き苗は、発生源となりやすいので早急に埋没させる。
- 葉いもち予防のための農薬は、各薬剤の使用方法に従い、予想される初発時期までに使用する。粒剤の散布時は、水深3～5cmの湛水状態とし、1週間程度止水する。なお、農薬使用7日後頃に効果を確認し、効果が不十分であれば治療効果のある茎葉散布剤を使用する。
- 移植時に使用した農薬の効果は、穂いもち感染期には低下しているため注意する。出穂前、

葉に進行型病斑が多くみられるほ場では、予防と治療効果を兼ね備えた農薬を使用する。なお、粒剤やパック剤は効果の発現が遅いので、必ず使用時期を確認する。

- 5 出穂期に入っても上位葉に病斑が多くみられる場合は、治療効果のある茎葉散布剤を散布する。出穂期以降もさらに発生が続くときは、天候等を考慮した上で、穂揃い 10 日後頃の傾穂期にも追加散布を行う。
- 6 農薬を使用したにもかかわらず、いもち病が多発した場合は、その農薬の効果が低い「耐性菌」が発生している可能性があるため、病害虫防除課または関係指導機関に連絡するとともに、下表を参考に他系統薬剤で追加防除を行う。

表 主な防除薬剤

薬剤名	FRACコード (注1)	成分(注2)	使用時期 / 使用回数	使用量/10a または倍率	作用性
オリゼメート粒剤	P 2	プロベナゾール	※1 / 2回以内	3～4 kg	予防
ブイゲット粒剤	P 3	チアジニル	※2 / 2回以内	3 kg	
ルーチン粒剤		イソチアニル	※3 / 2回以内	1 kg	
キタジンP粒剤	6	IBP	※4 / 2回以内	3～5 kg	
フジワン粒剤		イソプロチオラン	※5 / 2回以内	3～5 kg	
コラトップ粒剤5 コラトップジャンボ	16.1	ピロキロン	※6 /合計2回以内	3～4 kg	
ラブサイド粉剤DL・注3			※7	10～13パック	
ブラシン粉剤DL・注3 ブラシンフロアブル	16.1	フサライド フェリム ゾン	収穫7日前まで /合計2回以内	3～4 kg 1000倍・注4	予防 + 治療
ノンプラス粉剤DL・注3 ノンプラスフロアブル			U14	トリシク ラゾール	
ダブルカットフロアブル	16.1 24	カスガ マイシン			
カスミン粉剤DL・注3 カスミン液剤	24		穂揃期まで /合計2回以内	3～4 kg 1000倍・注4	

※1 葉いもちに対しては初発 10 日前～初発時に、穂いもちに対しては出穂 4～3 週間前に散布する（ただし収穫 14 日前まで）。

※2 葉いもちの初発 20～7 日前に湛水散布する（ただし収穫 45 日前まで）。

※3 葉いもちの初発 3 日前までに湛水散布する（ただし収穫 30 日前まで）。

※4 葉いもちに対しては初発 7 日前～初発時に、穂いもちに対しては出穂 20～7 日前に散布する。

※5 葉いもちに対しては初発 10～7 日前に、穂いもちに対しては出穂 30～10 日前に湛水散布する（ただし収穫 30 日前まで）。

※6 葉いもちに対しては初発 10 日前～初発時に、穂いもちに対しては出穂 30～5 日前に散布する。

※7 葉いもちに対しては初発 20 日前～初発時に、穂いもちに対しては出穂 30～5 日前に、水田にパックのまま投げ入れる。

注1) FRACコードは、殺菌剤の作用機構（効き方）による分類。同じコードの連用は避ける。

注2) 同一成分を含む薬剤については総使用回数に注意する。

注3) 粉剤DLを散布する場合、散布機の開度を1目盛程度絞り、散布しすぎないように注意する。

注4) フロアブル剤・液剤の10a当たり使用量の目安は次のとおり。

・本田初～中期 100～120 L・穂ばらみ期 120～150 L・出穂期 120～150 L

注5) 止水期間は1週間程度とする。

斑点米カメムシ対策



千葉県農林総合研究センター病害虫防除課原図

写真 斑点米カメムシ類成虫の大きさ比較 右の目盛りは1mm

左側から、アカヒゲホソミドリカスミカメ、アカスジカスミカメ、
ホソハリカメムシ、クモヘリカメムシ、イネカメムシ、ミナミアオカメムシ

上の写真は、千葉県で斑点米を発生させる主なカメムシについて、体の大きさの違いを示している。左側の2頭はカスミカメムシ類で、それ以外の大型斑点米カメムシ類と比べると、体が小さい。カスミカメムシ類は、姿や飛び回る音に気が付かず、見過ごすことがある。カスミカメムシ類と大型斑点米カメムシ類では対策が異なるので、斑点米が発生した場合、玄米の加害部位を観察し、原因となったカメムシ類の種類を特定して対策を取ることが必要である。

病害虫防除課が実施している斑点米の調査では、例年、大型斑点米カメムシ類の加害割合が高い。昨年は、カスミカメムシ類が登熟初期に加害したことによる頂部加害が15%となっていたのに対し、大型斑点米カメムシ類が登熟後半に加害したことによる側部加害が16%、基部加害が61%であった（この他に複数部位加害が8%）。

大型斑点米カメムシ類の中で、最も多い種類は従来同様クモヘリカメムシであるが、2015年からイネカメムシが増加傾向となり、主要種となっているほ場もある。また、ミナミアオカメムシが2018年から見られるようになった。ミナミアオカメムシは、1月の平均気温が5℃を上回ると越冬可能で、暖冬の影響が考えられる。イネカメムシとミナミアオカメムシは、斑点米を発生させる能力が高いとされている。出穂期が周囲と異なる水田は加害の可能性が高まることもあり、経営規模が拡大し栽培期間が前後に延長している経営体では、特に注意が必要である。

<防除の時期>

大型斑点米カメムシ類は、主に出穂後に水田内に飛来し、ふ化した幼虫が乳熟期以降の穂を登熟後期まで加害する。防除は、発生が少なければ乳熟後期（出穂後15日頃）に1回、発生が多ければ穂揃期と乳熟初期（出穂10日後）の2回行う。これは以下の理由からで、防除の効果を出穂後に発揮させることが肝要である。

- 1 出穂期 出穂すると思われる全茎数の、40～50%が出穂した日。出穂とは穂が葉鞘の先端より現れること。カメムシ類が水田に飛来する。
- 2 穂揃期 出穂すると思われる全茎数の、80～90%が出穂した日。飛来ピークであり、成虫はすぐに産卵する。この時期に成虫に吸汁されると、「しいな」になる。「しいな」は篩で除去されるため、斑点米にはならないものの減収となる。
- 3 乳熟期 これ以降に吸汁されると、斑点米になる玄米が発生する。この時期に水田に多く生息するのは、飛来成虫が産んだ卵から孵化した幼虫である。このため、防除は幼虫密度の低下を目的に行う。
- 4 薬剤散布を行っても、残効が切れた後に加害が予想される場合は、追加防除を検討する。

＜カスミカメムシ類の対策＞

カスミカメムシ類は、刺す力が弱いため、割れ粃等の開穎部分（隙間）から吸汁する。

割れ粃は、「あきたこまち」の様に本県では発生しやすい品種もあるが、栽培条件や気象条件で多発する場合もある。気象条件としては、6月に低温寡日照が続き、7月に入り一転して高温多照が続いた場合に、粃殻が小さく形成され、玄米の生育が旺盛で粃殻が閉じきれなくなり、割れ粃となる。

1 栽培方法による対策

粃数が過剰になると、割れ粃が増える。粃数の過剰は、①基肥量が多過ぎた、②中干しが適切に行えない等の理由で茎数が増え過ぎた、あるいは③穂肥の時期が早すぎた、等の理由で起こる。カスミカメムシ類による斑点米が多い場合は、これらの栽培方法を確認する。

2 粒剤での防除

カスミカメムシ類は、粒剤でも防除ができる。カスミカメムシ類の防除適期は穂揃期であるが、粒剤は、一旦水に溶けた成分が水稻に吸収されて効果が出るため、穂揃期の1週間前に散布する。

なお、大型カメムシ類の幼虫は、体が小さいため粒剤でも効果が得られるが、成虫は体が大きいことから、薬剤成分を吸収した水稻を吸汁させても効果がないため、粒剤ではなく粉剤や液剤を使用する。

＜畦畔の雑草対策＞

ほ場周辺の雑草は、各種斑点米カメムシ類の生息場所となる。出穂前後に草刈りをするると、斑点米カメムシ類は生息場所を失って水田の中に一斉に侵入する。このため、畦畔雑草は出穂2週間前までに除草し、予めカメムシの密度を下げておく。

草刈りの他に、これ以前の時期に除草剤を畦畔に散布する方法もある。その際、非選択性茎葉処理剤と土壌処理剤を混用すると抑草期間が2か月間程度と長くなり、高温時の作業負担の軽減にもつながる。なお、散布の際には専用ノズルや飛散防止カバーを使用する。

表 水田畦畔の雑草に使用可能な除草剤例

除草剤名	種類	同一成分 使用回数 (注)	HRAC コード	成分
ラウンドアップマックスロード	非選択 性茎葉 処理	3回以内	9	グリホサート
バスタ液剤		2回以内	10	グルホシネート
ザクサ液剤		2回以内	10	グルホシネートPナトリウム塩

注) グルホシネートとグルホシネートPナトリウム塩は同一成分として数える

Ⅲ 参考資料

○主要病害虫の発生状況

巡回調査結果（水稻・サツマイモ・ラッカセイ・サトイモ・秋冬ネギ：7月上旬，果樹：6月下旬）

作物名 (調査地域)	病害虫名	調査項目	調査結果			備考
			本年値	平年値	前年値	
イネ (県内全域)	いもち病(葉いもち)	発病度	4.45	0.68	2.06	
	紋枯病	発病度	0.00	0.01	0.06	
	ごま葉枯病	発病度	1.80	0.36	0.14	
	イネクロカメムシ	25株当たり寄生成幼虫数	0.01	0.85	0.26	
	フタオビコヤガ	25株当たり寄生幼虫蛹数	0.00	0.02	0.00	
	ニカメイガ	被害株率(%)	0.12	0.01	0.10	
	イチモンジセセリ	25株当たり被害包数	0.03	0.15	0.22	
	セジロウンカ	本田すくい取り捕獲虫数 注1)	0.09	0.36	0.03	
	ヒメトビウンカ	本田すくい取り捕獲虫数	1.08	0.60	0.46	
	ツマグロヨコバイ	本田すくい取り捕獲虫数	0.31	0.48	0.55	
	フタオビコヤガ	本田すくい取り捕獲虫数	0.16	0.13	0.14	
	コバネイナゴ	本田すくい取り捕獲虫数	3.18	2.80	5.81	
	大型のカメムシ類	本田すくい取り捕獲虫数	0.83	0.17	0.63	
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	本田すくい取り捕獲虫数	0.04	0.08	0.05	
	アカスジカスミカメ	本田すくい取り捕獲虫数	0.36	0.18	0.14	
	クモヘリカメムシ	雑草地すくい取り捕獲虫数 注2)	0.06	0.29	0.10	
	ホソハリカメムシ	雑草地すくい取り捕獲虫数	0.36	0.98	1.65	
	イネカメムシ	雑草地すくい取り捕獲虫数	0.00	0.03	0.01	
	シラホシカメムシ類	雑草地すくい取り捕獲虫数	0.26	0.31	0.63	
	大型のカメムシ類	雑草地すくい取り捕獲虫数	0.69	1.63	2.39	
アカヒゲホソミドリカスミカメ	雑草地すくい取り捕獲虫数	2.13	3.01	4.82		
アカスジカスミカメ	雑草地すくい取り捕獲虫数	14.91	17.78	55.30		
サツマイモ (印旛・香取)	ナカジロシタバ	寄生幼虫数	0.20	0.15	0.20	
	イモキバガ	被害葉率(%)	2.20	2.70	0.60	
ラッカセイ (千葉・君津)	そうか病	発病度	0.00	0.00	0.00	
	褐斑病	発病度	3.50	5.16	11.85	
	黒渋病	発病度	0.00	0.01	0.00	
	白絹病	発病株率	0.10	0.04	0.00	
サトイモ (印旛 香取 君津)	ハスモンヨトウ	幼虫寄生株率(%)	0.33	0.04	0.00	
	アブラムシ類	成幼虫寄生葉率(%)	46.07	55.97	34.57	
	ハダニ類	雌成虫寄生葉率(%)	32.33	30.98	19.43	
秋冬ネギ (長生・山武)	黒斑病	発病度	0.93	0.62	0.00	
	さび病	発病度	4.83	1.46	0.00	
	べと病	発病株率(%)	0.40	0.08	0.00	
	ネギアザミウマ	被害度	18.97	12.71	16.73	
	ハスモンヨトウ	被害株率(%)	0.00	0.00	0.00	
	シロイチモジヨトウ	被害株率(%)	0.00	0.00	0.00	
	ネギコガ	被害株率(%)	0.00	0.35	0.00	
	ネギハモグリバエ	被害度	0.50	1.76	0.30	
ナシ (県内全域)	黒星病	発病葉率(%)	0.85	2.09	0.94	
	黒星病	発病果率(%)	0.82	1.02	0.94	
	赤星病	発病葉率(%)	0.00	0.61	0.09	
	シンクイムシ類	被害果率(%)	0.00	0.00	0.00	
	ハマキムシ類	被害果率(%)	0.00	0.01	0.00	
	ハダニ類	雌成虫寄生葉率(%)	0.00	0.10	0.00	
	アブラムシ類	成幼虫寄生新梢率(%)	4.53	5.87	0.97	
	ニセナシサビダニ	被害新梢率(%)	0.00	0.60	0.00	
温州ミカン (安房)	そうか病	果実発病度	0.40	0.07	0.05	
	かいよう病	果実発病度	0.04	0.00	0.00	
	黒点病	果実発病度	0.00	0.00	0.00	
	ヤノネカイガラムシ	成幼虫寄生葉率(%)	0.00	0.06	0.00	
	ミカンハダニ	雌成虫寄生葉率(%)	0.40	6.39	0.00	
	アブラムシ類	成幼虫寄生新梢率(%)	0.00	0.46	0.00	
	ミカンハモグリガ	幼虫寄生葉率(%)	0.40	0.53	0.00	

注1) 調査ほ場で捕虫網を20回振り、すくい取った成幼虫の平均値

注2) 調査ほ場周辺の畦畔や路肩などの雑草場で捕虫網を20回振り、すくい取った成幼虫の平均値

トラップ月間誘殺数（6月）

区分	調査害虫名	トラップ設置場所	誘殺数			備 考
			本年値	平年値	前年値	
水稲予察灯	イネミズゾウムシ	千葉, 香取, 安房	2.0	2.0	0.0	頭/月
	セジロウンカ	〃	0.0	0.3	1.0	
	トビイロウンカ	〃	0.0	0.0	0.0	
	ヒメトビウンカ	〃	0.3	1.6	0.7	
	ツマグロヨコバイ	〃	13.0	14.0	2.7	
	フタオビコヤガ	〃	1.3	1.5	0.3	
	イネヨトウ	〃	5.0	3.5	3.0	
	ニカメイガ	〃	0.7	0.4	0.0	
	コブノメイガ	〃	0.0	0.0	0.0	
	イネクロカメムシ	〃	3.3	5.9	14.0	
	クモヘリカメムシ	〃	0.3	0.1	0.0	
	ホソハリカメムシ	〃	0.7	0.0	0.0	
	イネカメムシ	〃	0.0	0.2	0.3	
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	〃	8.7	16.2	5.7	
	アカスジカスミカメ	〃	15.0	32.8	110.0	
ミナミアオカメムシ	〃	0.3	0.1	0.0		
(果樹等カメムシ類)	チャバネアオカメムシ	〃	1.7	2.2	4.7	頭/月
	クサギカメムシ	〃	0.0	0.2	0.3	
	ツヤアオカメムシ	〃	0.0	1.1	2.7	
	アオクサカメムシ	〃	0.0	0.2	0.0	
	イチモンジカメムシ	〃	0.0	0.1	0.3	
	ホソヘリカメムシ	〃	0.0	0.0	0.0	
(コガネムシ類)	アカビロウドコガネ	〃	3.7	7.3	6.0	頭/月
	オオビロウドコガネ	〃	1.0	9.8	3.7	
	ヒメコガネ	〃	0.3	3.2	5.7	
	ドウガネブイブイ	〃	2.7	1.5	1.7	
	オオクロコガネ	〃	3.0	17.2	4.3	
	アオドウガネ	〃	9.0	0.9	1.7	
果樹予察灯	チャバネアオカメムシ	安房	0.0	3.0	5.0	頭/月
	クサギカメムシ	〃	2.0	2.6	4.0	
	ツヤアオカメムシ	〃	4.0	6.2	5.0	
	カメムシ類	〃	6.0	11.8	14.0	
	アオクサカメムシ	〃	0.0	0.0	0.0	
	ミナミアオカメムシ	〃	0.0	0.0	0.0	
性フェロモン	ドウガネブイブイ	印旛, 香取	3.7	3.2	3.4	頭/日
	ヒメコガネ	印旛, 香取	0.2	0.3	0.1	
	コナガ	海匝	5.4	6.5	7.9	
	ハスモンヨトウ	県内全域	4.6	3.9	6.2	
	シロイチモジヨトウ	県内全域	0.3	0.1	0.2	
	オオタバコガ	県内全域	1.3	0.9	0.4	
	タバコガ	県内全域	0.5	0.4	0.3	
	ナシヒメシンクイ	東葛飾, 印旛	1.4	1.0	1.6	
	モモシンクイガ	東葛飾, 印旛	0.0	0.0	0.0	
	シンクイムシ類	東葛飾, 印旛	1.4	1.0	1.6	
	チャハマキ	東葛飾, 印旛	0.3	0.3	0.4	
	チャノコカクモンハマキ	東葛飾, 印旛	1.7	1.8	1.5	
	ハマキムシ類	東葛飾, 印旛	2.0	2.1	1.8	
	チャバネアオカメムシ集合フェロモン	チャバネアオカメムシ	県内全域	0.7	9.9	
ツヤアオカメムシ		〃	0.0	0.3	0.2	
クサギカメムシ		〃	0.0	0.7	0.3	
カメムシ類		〃	0.7	10.9	10.3	
マルボシヒラタヤドリノエ (天敵)		〃	0.3	1.6	2.2	

注) 種類別の単位の違いに注意

○気象予報

7月8日気象庁発表

関東甲信地方における向こう1か月間の確率(%)

要素	低い・少ない	平年並	高い・多い
気温	30	30	40
降水量	30	40	30
日照時間	30	40	30

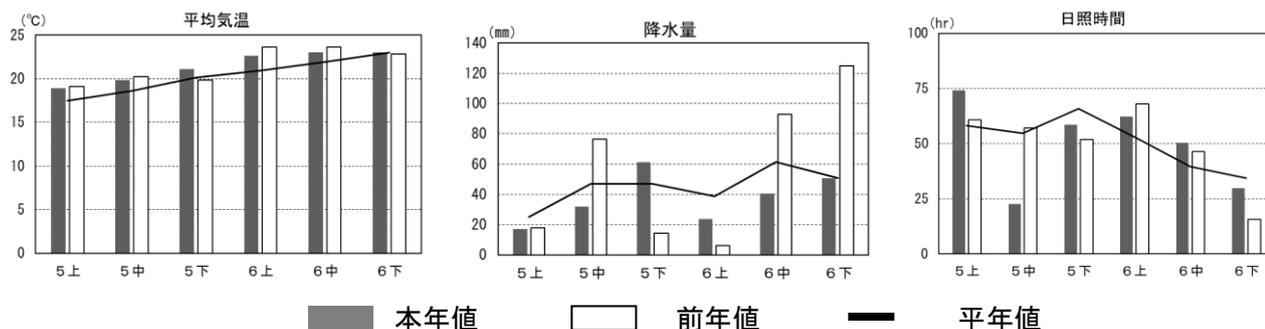
出典：気象庁ホームページ

(https://www.jma.go.jp/jp/longfcst/103_00.html)

向こう1か月間の各気象要素の平年値

(7月14日～8月17日)

要素	千葉	銚子	館山
気温(°C)	26.8	24.8	26.4
降水量(mm)	113.8	98.3	129.6
日照時間(hr)	210.0	237.7	238.3



農薬は適正に使用しましょう。無登録農薬の使用はできません。

- 農薬は、農薬取締法に基づいて、使用できる農作物の種類、適用病害虫、希釈倍数、収穫前日数、総使用回数などが定められています。
- 登録番号のない薬剤は、農薬として使用できません。登録農薬には必ず登録番号が記載されています(記載例 農林水産省登録第〇〇〇号)。
- 農薬はラベルをよく読んで適正に使用しましょう。
- 飛散しないよう工夫して散布しましょう。
- 農薬を使用したら必ず記帳するようにしましょう。
- タンクやホースは洗いもれがないようきれいに洗っておきましょう。

- ・ 病害虫発生予察情報はインターネットでもご覧いただけます。
<https://www.pref.chiba.lg.jp/lab-nourin/nourin/boujo/>
- ・ 次回の発行予定は8月18日です。なお、注意報等の臨時情報は逐次発行されます。
- ・ 薬剤の選定については、最新の農薬登録情報を確認してください。
<https://pesticide.maff.go.jp/>



問い合わせ先

千葉県農林総合研究センター病害虫防除課

〒266-0014 千葉市緑区大金沢町180番地1

TEL 043(291)6077 FAX 043(226)9107

E-mail cafrc-bojo@mz.pref.chiba.lg.jp